

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月18日現在

機関番号：34502

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520603

研究課題名（和文） 沖縄施政権返還をめぐる社会運動・思想の研究

研究課題名（英文） A Study on the Social Movements and Thought over the Administrative Reversion of Okinawa

研究代表者

森 宣雄 (MORI YOSHIO)

聖トマス大学・人間文化共生学部・准教授

研究者番号：20441157

研究成果の概要（和文）：本研究は、資料収集・関係者のオーラル・ヒストリー調査などによって研究基盤の整備を進めながら、米国統治下の沖縄戦後史（1945-72年）、特にその最終段階となる施政権返還期（1969-72年）における社会運動とその思想経験の独自性を明らかにし、近代の主体主義的な世界認識とは異なる、自然環境や社会的弱者と共生する社会思想・歴史意識を沖縄社会が育んできたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this study, developing the research base by the method of oral history and collecting historical resources, I revealed the unique, non modern subjective characters of the social movements and thought in the postwar Okinawa (1945-72), which held the worldview of social symbiosis with natural environment and minorities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：沖縄戦後史、オーラル・ヒストリー、社会思想史、社会運動史、グローバル・ヒストリー、歴史哲学、グリーン・エコノミー、エコロジカル・フェミニズム

1. 研究開始当初の背景

(1) 先行する時期区分の研究

研究代表者は、本研究の開始までに2度の特別研究員奨励費の支給を受け、本研究課題に先行する時期の沖縄近現代史について実証的かつ理論的な研究をまとめてきた。

(2) オーラル・ヒストリーの好機

そのうえで、本研究を行なう期間は、研究課題の対象となる歴史的人物たちが定年退職を迎える時期に当たり、歴史の証言を記録

化し、また資料を整理するのに適切な時機であると判断した。

(3) ナショナル・ヒストリー批判を超える

そして現代につながる沖縄戦後史の実証的かつ理論的な研究によって、1990年代以降に日本の歴史学界を風靡したナショナル・ヒストリー批判およびメタヒストリーの限界（一国史を批判しつつ一国氏の視座にとどまる点と、歴史の物語論）を乗り越える、実証的かつ理論的なグローバル・ヒストリー

の歴史像を提起できると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、資料収集・関係者のオーラル・ヒストリー調査などを行なって研究基盤の整備を進めながら、米国統治下の沖縄戦後史（1945—72年）、特にその最終段階となる施政権返還期（1969—72年：日米両国による沖縄施政権の返還決定から返還実施まで）における社会運動とその思想経験の独自性を明らかにし、併せて研究代表者の10年来の沖縄戦後史研究を集成させ、その成果を東アジアの近現代史をめぐる公共的な討議空間に向けて発信しようとする取り組みである。

3. 研究の方法

(1) オーラル・ヒストリーと資料収集

歴史学研究としては最も新しい時期の社会運動・思想を対象とする本研究では、研究テーマに関する資料収集と整理を、関係者への聞き取り調査と同時進行的に、集中的に行なった。関係資料は、関係者自身が所在を把握しないし、みづから保存している例が少ない。研究代表者はこれまでも、関係者へのインタビューを進めながら資料収集を行ない、資料と照合しつつオーラル・ヒストリー記録の校閲と改訂を重ね、資料集をまとめていく手法で、1950年代の沖縄社会運動・思想を研究してきた。本研究でも同様に、多くのインタビュー記録を作成しており、追って、証言者との同意の上で公表ないし研究機関に委託保存していく予定である。

(2) 研究成果の公表による環境整備

沖縄施政権返還期の思想・運動は、政治的党派的な対立を含みながら展開されたものであり、客観的学術的な歴史研究の対象としては開拓を待つ段階にあるので、研究課題の学術的な意義について社会的な認知を広げる活動は、関係者への調査活動を円滑に進め、研究協力への同意を広げて行くためにも不可欠である。それゆえ本研究では、政治的な党派性などの文脈から離れた学術的な検討対象として、当該期の沖縄の歴史経験を論じる論著を、新聞雑誌などで随時広く社会的に発信する方法を採った。

4. 研究成果

(1) 資料収集・オーラル・ヒストリー調査

沖縄県および鹿児島県奄美郡における資料収集および関係者へのインタビューによるオーラル・ヒストリー調査は、多くの成果を挙げ、当面はほぼ非公開のインタビュー記録を多数まとめている。また、それらをもとに研究成果の図書2点などを公刊した。なお、研究申請時の当初計画では米国の公文書館

で収集する予定だった米軍の沖縄統治資料は、沖縄県公文書館がすでに収集・公開しており、これを利用することで海外出張を行なう必要はないことが判明した。

(2) 沖縄戦後史の思想的独自性の解明

本研究の中心的課題である、沖縄戦後史の思想的独自性については、次のようにまとめられる。国家の帰属が不明瞭にされ、長期にわたり主権国家の保護の範囲外に置かれる厳しい経験の中から、沖縄・奄美では、国家や主権性に頼らずに世界に連帯を求める社会運動の思想と政治的主体性を構築してきた。何らかの国家や民族主義や党派性を媒体とせず、生活者の視点から直接的に世界につながり、公正な世界のあり方を訴えていく、その思想・運動経験は、主権国家の排他的な域内支配の集積によって構成される近代世界の国家間システムとは異なる世界像を提起するものである。

以上のような沖縄戦後史の思想的独自性が発現してくるなかで、とくに注目すべきは、施政権返還後に明瞭にあらわれてくるようになった社会運動の質の変化である。国家に抵抗しつつも、沖縄社会は、みづからは主権国家を樹立せず、施政権返還を日米両政府に余儀なくさせた（憲法）構成的権力を放棄していくかたちで、沖縄戦後史は終焉を迎えた。だが返還後の沖縄現代史において、沖縄の社会運動は主権的主体とははっきりと異なる、自然環境や女性を主体とする形態へと変様を遂げていった。ここにおいて、男性中心の主体主義的な権力闘争の物語とは明確に一線を画する、現代沖縄の社会運動・思想の世界観はその本質をあらわにするにいたったと考えられる。

(3) 広い文脈における本研究の位置づけ

上記の沖縄戦後史の独自性を、より広い文脈にどう位置づけるかについて、一方では、人類規模の世界史、グローバル・ヒストリーと、歴史哲学上の問題に位置づけ、主体主義的な歴史哲学とは異なる歴史哲学の理論を、E・レヴィナスなどの現象学を参照しつつ理論化した。また他方で、近代の主体主義的な社会観と異なる、その思想・運動の将来的な展望に関しては、近い関係にあるものとして、グリーン・エコノミー（環境保全型経済）およびエコロジカル・フェミニズムとの連関から検討を行なった。

(4) 成果の公表

研究成果の公表について、研究申請時の当初計画では、類似の歴史経験を持つ韓国・台湾などの研究者との国際討議を通じて、沖縄現代史の独自性を学界・社会に伝えていく方法を予定していた。だが研究期間中の2009

年の政権交代後、沖縄の基地問題が日本の外交・内政にわたる一大争点となったため、メディアや社会の求めに応じて、直接に社会に研究成果を伝えていくことになり、結果として多くの成果を公表することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① MORI Yoshio, 'The Return to Ordinarity: An Introduction to the New Perspectives on the History of Postwar Okinawa,' 『サピエンチア 聖トマス大学論叢』46号、27-66ページ、2012年、査読有
- ② 森宣雄「歴史の外部と倫理—グローバル・ヒストリーの歴史哲学によせて」『立命館言語文化研究』第23巻第2号、39-59ページ、2011年、査読無
- ③ 森宣雄「戦後沖縄社会運動史の往きと還り」『情況』第3期第11巻第14号、140-55ページ、2011年、査読無
- ④ 森宣雄「沖縄戦後史の分岐点が残したある事件：「国場事件」について」『サピエンチア 聖トマス大学論叢』44号、1-24ページ、2010年、査読有
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007578358>

[学会発表] (計3件)

- ① 森宣雄「奄美の現代史が生んだ思想—民族・プロレタリアート・人間の原像」北海道大学 GCOE「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」・日本島嶼学会徳之島大会主催「国境フォーラム」、2011年9月12日、鹿児島県徳之島交流ひろばほらい館
- ② 森宣雄 (世話人・司会) ほか、セッション「沖縄の〈現在〉を思想史からとらえかえす—歴史、現在、そして新たなる世界史へ」において「問題設定：沖縄の日本国政参加40年と世界、未来」を発表、社会思想史学会、第35回大会、2010年10月24日、神奈川大学

[図書] (計2件)

- ① 森宣雄『地のなかの革命—沖縄戦後史における存在の解放』、現代企画室、2011年、総ページ数480ページ
- ② 富山一郎、森宣雄共編著『現代沖縄の歴史経験—希望、あるいは未決性について』青弓社、2011年、総ページ数424ページ

[その他]

- ① 森宣雄「奄美と沖縄が会おうとき」『沖縄タイムス』朝刊2010年5月27・28日
- ② 森宣雄「国家の向こう岸へ—奄美と沖縄が会おうとき」『南海日日新聞』朝刊2010年6月30日・7月1日
- ③ 森宣雄「徳之島・歴史の回廊—「普天間」に揺れる島を行く」『南日本新聞』朝刊2010年7月31日
- ④ 森宣雄「沖縄戦を止める思想—思想史から見た評価書搬入阻止行動」『沖縄タイムス』朝刊2012年1月13日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 宣雄 (MORI YOSHIO)

聖トマス大学・人間文化共生学部・准教授
研究者番号：20441157

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし